
亡目奇談

実アラズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡目奇談

【Nコード】

N6245L

【作者名】

実アラズ

【あらすじ】

彼女が呼んでいる。だから行かなくてはならない。彼女のもとへ行かなくては。——彼女が“視て”いるから。

可能視民（前書き）

読む前の注意事項

* 作中の個人名・団体名・その他はすべて架空のものです。実在するすべてのものと関係ありません。あつたらびつくりします。

* 当小説は全編付け焼刃の知識と多大な妄想補完で構成されています。真面目なホラー小説 or 警察小説を期待されている方は、申し訳ありませんが確実に期待外れになると思われます。

* 当小説には姉妹商品というかシリーズ的な立場の小説が存在しますが、それぞれ設定やジャンルが微妙に異なります。一種のパラレルだと考えていただければ幸いです。

ご了承くださいただけた方はごゆっくりどうぞ。

可能視民

彼女はそこでふつと微笑んで――それともずっとしかめ面だったかもわからない、私にはよく見えなかったのだ――そうして囁いた。あなた。ね、そう、あなたよ。どうしてそこから動かないの？

そんな床の上じゃあ冷たいでしょう。それにとっても硬いじゃない。ずうつとそこにいるけれど、あちこち身体が痛くはないのかしら。

しいんと静まり返った部屋の中で、彼女は静かに溶け込むように椅子の上、本を一冊とても大事そうに両腕でしっかりと抱えている。とてもとても、愛おしそうに。彼女のか細い声は部屋のなかでふわふわと反響し、雨垂れのようにぼたぼた落ちた。それには色がなかった。

椅子が小さく軋んだ。彼女が動いたらしかった（、、、、）。
そうして僕は、黙り込んだまま。

↓

影踏紀行

僕がこの事件の捜査にあたっからもう随分と経つね。ああ、だいたい十一年くらい前になる。

あのころの僕はとても若かったのだよ。正義とか平和とか、そういう言葉の持つ力を無条件に信じていた。それくらい若かったのさ。それに当時は正義感が服を着て歩いているような人を先輩と呼んで崇めていたものだ。そうだな、今は交通課にいるんじゃないか、彼……少なくともあの事件のあとしばらくはそうだったはずだ。

彼——仮に新島さんと呼ぼう、新島さんと僕はある男の行方を追っていた。とある証券会社の元社員の男だ。借金で首が回らなくなった拳げ句に会社の金を横領して、バレると同時に逃げた男。仮に吉岡と呼ぼうか。

僕は単独で吉岡を探して某県まで足を延ばし、いくつかの目撃証言をもとにある小さな町までたどり着いた。

本当に小さい町だった。町の出入り口は古びた木造の無人駅がひとつあるきりで、電車は多いときでも一時間に一本ほど。駅から出て見渡すと、四方は山々を背景にして寂れた集落と田畑と雑木林とがモザイクを描き、その中を縫うようにして小川が幾筋か流れているのが見える。

僕も決して都会とは言えない土地の出なのだけれども、そこは僕の故郷よりも更に鄙びているようだった。昼間だというのに静寂に包まれた町。辺鄙な山中にあつたために市町村合併の対象にさえならなかったというが、それでよく今まで財政が成り立ってきたものだと思っただ。

吉岡がなぜ逃亡先にその町を選んだのかはわからない。彼の出身はそこから遠く離れた他県にある港町だった。僕は可能なかぎり彼の経歴を調べたが、それで僕がひとつも見落とさずにいたとしたら、吉岡が以前にこの町を訪れたことなど一度としてないはずなのだ。

なんの接点もない土地を選んだのは、搜索の眼を逃れるためだろうか。それとも闇雲に逃げ回るうちに迷い込んでしまったのかも知れない。

目撃者たちによれば、吉岡はいつも何かに怯えているようにしていたらしかった。拳動不審なので眼に留まったのだと証言する人も出てきたくらいだ。僕はそれでも、故郷から離れた場所へと彼が向かったのは、彼なりに故郷への償いの気持ちがあつたのではないかと思っていた。というのも僕がその町に着く三日前、彼の母親からこんな話を聞いたからだ。

『刑事さん……黙つちよつてごめんなさいね、本当は、昨夜あん子から電話あつたんですよ』

『電話？ それで息子さんは何と？』

『いえね。公衆電話だったし、何とも言わねで……んだとも名前をね、呼んでみだらずでふつり切れでしまつて、それぎり』

実年齢より老けて見える母親の右眼は、白っぽい色に濁っていたが、それでもなお美しかった。

『ども私は、あん子だったと思います。……合わす顔がねえんでしような』

僕は思ったのだ。逃亡中で、時間的にも精神的にも切羽詰まっていたらう吉岡が、時間を割いても自宅に電話したというのなら、故郷に帰らない覚悟でもして、せめて最後に家族の声を聞きたかったのではないだろうか。そして謝罪のひとつも言いたかったのではないだろうかとも。

どのみち吉岡の逃走経路は故郷とはかけ離れた方角に延びていった。よりよつてこんな田舎の山奥に。

この選択が彼にとつて吉と出るか、それとも僕にとつて吉と出るかはまだわからなかった。吉岡はどこでどうしているのだろう。本数の少ない路線を使って電車で逃げるのはリスクが大きいが、吉岡にはそれ以外にこの町を脱出する手段はないはずだ。

僕は写真を片手に民家を訪ねて回った。過疎化も進んでおり世帯

数はそう多くはないが、何しろ人家は小さな集落を造ってあちらこちらに散在している。かといつてのんびり聞きこみをやっていたらいつ吉岡に気取られるかもわからない。それなりに辛い作業になった。けれども情報は得られたから良しとしよう。

不審な人物が「白い屋根の家」に入っていくのを見た、と川沿いに住む老人が言った。僕が持参した吉岡の写真をためつすがめつしてから、確かにこの人だった、きよろきよろして落ち着かない様子だったので気になっていたんだ、と。

白い屋根の家というのは探さなくてもすぐに見つかった。山の深緑のなかにぽつかりとその一角が覗いているので嫌でも目立つ。またどうしてそんなわかりやすい場所を選んだのだろう。吉岡はもしかしたら僕にさっさと見つけてほしいのではなかるうか。話を聞かぎり怯えっぱなしの逃亡だというし、いつそ早くお縄にかかったほうが彼の気も楽になるんじゃないか。

そんなことを思いつつ、僕は一晩はさんでから白い屋根の家へ向かった。

冷たい感じのする家だった。屋根どころか壁という壁が真っ白に塗りつくされ、窓という窓が白いテープで封じられていた。普通の家でないことはすぐにわかった。

誰が住んでいるのかはわからない、とこの町民でさえ言っていたが、こんな家にそもそも人が住んでいるものだろうか。住んでいたところでまともな人間だと思えない。真っ白な外装がすでに病的な様相を醸し出している。

玄関にはインターホンの類がついていなかった。鍵もかかっていなかった。僕は静かに扉を開け、足音が鳴らないように神経を尖らせながら進んだ。

外装があれなので内装もどんなものか不安だったが、意外にもごく普通の洋風の一軒家といった感じだった。開けた玄関は小ぶりながらホールのような。向かって右側にはビニールテープで封じられた階段、左側には形も色もそっくりな扉がふたつ並んでいる。扉に

はそれぞれ文字の書かれた木製の板がぶら下がっていたが、どちらも消えかかっている読むことはできず、そのうえしっかりと施錠されていた。

僕は階段の下へ行った。テープはぼろぼろだ。見上げると二階の様子がかすかに見えた。いくつかの扉が規則的に並んだありきたりな光景。僕はその中のひとつが気にかかった。

どれも一階にあるそれとよく似た木製の扉なのだが、最奥にあるものはそうではなかった。……外装と同じ白に塗られていた。

そこか。僕は思った。吉岡はそこにいるのか。根拠も何もなかったが、僕はほとんど確信していた。

吉岡、おまえはそこで、まだ会ったこともない僕を待っているんだな、と。

↓

不可視民

昔、僕の後輩に変わった奴がいた。村田っていうんだが。

某大手証券会社の横領事件は知ってるかな。僕は以前その事件の捜査をやっていたんだよ。捜査というか犯人の……なんだっけ。吉岡一志っていったかな。その人が行方不明になったので、捜索しなければならなかった。

たまたま僕は他の事件の捜査も手伝っていたものだから、その事件のことはほとんど例の村田に任せていた。村田は真面目な奴だったから僕としてはこんなに楽なことはなかったよ。

彼から連絡がくるまでは、ね。

怯えて？ いや、そういう感じではなかった。それより異常に興奮していたと言ったほうがいいだろう。落ち着きがなかったという点ではそれも間違いではないけどね。

彼はひどく饒舌になって言ったよ。井島さん、吉岡を見つけました、もう死んでました、って。

被疑者死亡っていうのはあまり気持ちのいいことではないんだけどね、後の処理もいろいろと面倒だし。でも彼はそういう発想ができる状態ではなかった。何か訳のわからないことを延々と話していた。

僕は軽く叱責してから場所を訊いた。彼が以前に目星をつけていた地域の小さな町だと訊いて、とにかく僕もそこへ向かった。もちろんひとりではなく、何せ彼の話では吉岡が他殺か自殺か事故なのかもわからなかったものだから、鑑識官とか連れて行ったほうがいいだろう人員は片手じゃ足りないほどいたんだ。

僕がその町に着いたのは夕前ごろ。迎え出た村田はというと、前日とは打って変わってすっかり落ち込んでいた。まさか僕に叱られたせいじゃあるまいし、と思って尋ねてみたら、あいつ何て言ったと思う？

『井島さん、あの少女がどこにもいないんです』

なんの話だつて訊き返した。村田は言った。昨日、私、話しましたよね、って。

うん、ほら、僕ちゃんと彼の話聞いてなかったからね。もう一度ちゃんと聞いてやったらこうだった。

吉岡の死体がある部屋に視覚障害のある少女がいたので、話を聞こうと思っていたのに、今日になって彼女を探したらどこにもいない。町民に彼女のことを訊いても誰も知らないという。

確かにその状況は困る。

けれども僕たちはまず吉岡の、いや、吉岡とされている人物の遺体を確認しなければならなかった。もしそれが吉岡でなければ別の事件になってしまう。もっとも確かに吉岡だったとしても、その死体の状態によつては違う課の人間を呼ぶ羽目になるだろうが。

村田の案内で山に入つてゆくと、これだと説明されなくてもわかるほどはつきりとそれが姿を現した。

ごく普通の一軒家。ただし、廃墟。

見たところ外壁はかなりきれいに塗装されていて、それだけ見ると人家のようだったが、周囲の草むらの荒れようや封じられた窓からしてとても人が住んでいるとは思えない。逆にその状態で外壁だけどうしてこんなにこまめに塗り直した跡があるのか不思議……というか、不気味だった。

村田はずかずかと家の中に入つていった。埃っぽい室内は思いのほか整然としていて驚いた。村田は一階にある扉には眼もくれずに二階へ上がつていった。

階段の横には千切れたビニールテープがくしゃくしゃになって散らばっていた。もしかしたらこの階段を塞いでいたものかもしれない。

僕らも村田に続いて二階へ上がった。廊下の左右は対称に並んだ扉があつたが、やはり村田はそれらを見せずすんでいった。廊下の突き当たりにある扉が目的地らしかった。

吉岡の遺体はその部屋の隅に蹲るようにして転がっていた。後から聞いた話では寒さで心臓麻痺を起こしたらしい。

苦悶の表情で死に絶えた男の顔は見る者の哀れを誘った。間違はなく吉岡一志だった。こんな恰好じゃ山の夜は辛かったでしょうねと誰かが言った。確かに身体を抱えようとしているままの両腕は、よほど寒かったと見えて、何度も擦ったような跡があった。

村田は言った。昨日はその椅子に少女が座っていたんです、と。見るとロッキングチェアに厚手の布を張ったような感じの高そうな椅子が吉岡のいるのとは反対側の壁際に鎮座している。どちらかというと少女よりは老婆のほうがイメージに合うような代物だった。

見つからないのなら仕方がない。第一これは事故で、誰かから証言をとる必要もそれほどない。もちろんこれは事故だと正式に断定されたらの話だが。だからそんなに落ち込むんじゃないよと村田に言い聞かせると、そうじゃないんですよ井島さん、吉岡は待ってたんだ、待ってたのに……とかなんとかぶつぶつ言った。

さて、僕の話はこれだけだ。もう何も無い。

もしかして、きみ、村田にも話を聞くのかい？

やめたほうがいいよ。最初に変な奴と言ったけど、もともとは真面目な好い奴だったんだ。あの事件からおかしくなってしまったんだよ。

あいつが会った少女というのは何者だったんだろう。それは今もって謎のまま。でも僕は知らなくてもいいと思うんだ。

僕は超常現象の類を信じてはいないけど、しいて言うならその少女はそれに当てはまるものじゃないかと考えている。そうでなければただの狂人だ。偶然あの部屋に迷い込んで、村田をおかしくさせた狂人なんだ。

だって考えてごらんよ。

山の中にある誰も住んでいない家の、いちばん奥のこぜまい部屋で、死体と一緒に一週間以上も暮らす人間がいると思うかい？



性悪論者

僕には何もない。

どこに行けばいいのかもわからない。ただ確実だったのは、僕の足がひたすらに後戻りのできない道へと進んでゆくことだけだ。僕にはそれを止めるすべも力もなかった。

適当に切符を買った。適当なところで乗り換えた。

彼女の声が耳元でがんと鳴り響いている。

知らない駅で降りた。僕の挙動が何かおかしかったのか、周囲の人間がちらちらとこちらを見ている。困ったな。

僕はどこに行くのだろう。

彼女がじつとこちらを見ている気がする。あの、何の色も付いていない眼で。

僕はどこに連れて行かれるのだろう。

また乗り換えた。ほとんど知らない世界に踏み込んでゆく。

ああ、僕はどこに向かっているのだろう。

彼女が見ている。掲示板の後ろから。地下鉄の柱の陰から。隣の車両から、階段の上から、彼女が僕を見張っている。

僕が、彼女の呪縛から逃げ出すことのないように。

また知らない駅で降りた。僕の挙動が何かおかしかったのか、周囲の人間がこちらをちらちらとこちらをこちらをちらちらと、ああ、鬱陶しい、見てくるのだけど、何だというのだ。僕が何をした。僕はこれから、彼女のもとへ、彼女の待つ部屋へ行かねばならないというのに。邪魔をするな。僕は、そうだ僕は彼女に謝罪して、許しを請わねばならぬのだから。どうか邪魔をしてくれるな。

彼女の憎悪。それが僕を動かしている。

彼女の恩赦。そのために僕は歩く。

だから邪魔をしてくれるな。抗えない僕に希望を見せるな。それくらいなら、僕は定められたものに従って、呪われた道をひた進ん

だほうが楽だと思う。

それとも彼女は僕に安息などいらないと言っただろうか。

僕の歩調は速くなってゆく。今度はどの電車に乗ればいいだろう。掲示板の時刻表をぼんやり眺めて、この駅からいちばん遠くまで行くものを探した。終点まで乗ってゆけば何時間もかかるだろう。

僕は財布を開いた。小銭を数えてみて、なんとなく空腹に気がついたので、缶の緑茶と菓子パンを買った。

旅はまだ終わらない。彼女のもとに辿りつくまで。

僕はきよきよと周囲を見回した。彼女はどこから僕を見守っているのだろうか。そのときちょうど電車から降りてきた人々が改札口に殺到していた。そしてその人混みから、確かに彼女がこちらを見ていた。

噫。^{ああ}

逃げないとも。僕はそう呟いてホームへと歩き出した。固いコンクリートの床が乱暴に足を跳ね返したが、それでも僕の歩みは靴に鉛を仕込んでいるかのようにずしりと重かった。

ホームについてから目的の電車が入ってくるまで僕はずっと眼球を左右に回らせていた。僕を見る人がいる。不審そうに見ている人がいる。

僕は確かに彼女からは逃げない。けれども、もしも——もしかして僕が誰かにこの足を止められることがあったなら、そうしたら僕はもう進まなくてもよいのではないか。そう思わずにはいられない。僕は確かに彼女からは逃げない。逃げられない。

けれども、僕を誰かが見つけてくれたら。彼女のもとへ行かずに済むのではないだろうか。彼女のいる地獄まで、こちらから出向かずとも。

恐ろしいのだ。今もどこかで彼女が僕を見つめている。私がどこか違う場所へ行ってしまうないように。僕が、僕を、僕に、考えただけで恐ろしい話だ。彼女が見ている。彼女が、あの光（、）の（、）ない（、）眼をして、僕を見ている。どこに潜んでいるのかは

知らないが。

ホームを吹き抜ける生温い風。僕は電車が停まるのを待つ。

古い蝦茶色のシートに腰掛けて溜息をつく、僕は窓辺に設置された簡易棚に買ったものを置いた。窓の外には人間の造った無機質な世界が広がっている。硬質で、救いのない、型抜きだらけの世界。けれどもこうして彼女の元へ向かう僕にとっては秩序という名の慈悲をくれる場所だ。僕が二度と戻れない場所。たとえば彼女という絶対（、、）自然（、、）と相反し、僕のような者の罪を覆い隠し、あるいは購うことさえ忘れさせて、ただ漫然と生きるだけの。それはあらゆる人間にとって平坦だ。つまらないかもしれないが、非情な自然（、、）よりはよほど楽だ。

僕はどこまで行けば赦しに辿りつけるのだろうか。

僕はどこに向かうのだろう。

どこまで行けば彼女に会えるだろう。

どこまで行けば彼女は会ってくれるのだろうか。

缶のプルトップに爪をかけながら僕はふと車窓に眼を遣った。既に発車して久しい電車は柔らかな陽の射す竹林を抜けたところだった。田畑と山がその向こうに見えた。

僕はぼんやり思った。そろそろ降りよう。訳もなくそう思った。

ここが僕の終着駅だ。ここで、このどこかで彼女が待っている。

車掌のアナウンスに従って駅に降り立った。駅には誰もいなかった。僕は少し安心して、あるいは少し残念に思っ、ゆっくりと息を吸った。急に目尻が熱くなった。

もう終わるのか。誰にも見つけてもらえない旅が。

荷物ですらなくなった空缶とパンの袋を駅のゴミ箱に捨てた。それから前方の道に眼を凝らすと彼女の後ろ姿が見えた。ついてこいと言っているようだった。僕はのろのろと歩き出す。身体はひどく重たかったが、ここで留まっているわけにもいかない。彼女が僕を呼んでいる。

考えた。どうして僕はこんなに疲れているのだろうか。

考えた。どうして僕は彼女に会おうとしているのだろう、こんなに恐ろしがつているくせに。今だって両足が震えているのに。

考えたがわからなかった。何もかもが不可解だ。なんだってこんな思いをしなきゃならないんだ、僕が何をしたっていうんだ、僕が、僕に、僕、僕を、僕は、何をしようというんだ。この町で。

わからないのはそれが理解の範疇を遥かに凌駕しているからだ。それは絶対的に正しく、なお優しく、かつ残酷な理。そうすることが必然であり、殊更に悪逆で、何度も繰り返し繰り返し地面に膝を衝いては泣き叫ぶということなのだ。挫折して失望して、誤って、都合よく魔が差して、またそれで自己嫌悪して卑睨して懂着して、そうしてまたいつか誰かに救いを求めるのだ。

僕は悟ったようにぶつぶつ言った。僕には救いはないけれど、せめて恩赦が必要だった。彼女の赦しがなければならなかった。それはなにより朽ち果てそうな僕のこのころのためだった。

僕を赦せるのは世界でただ彼女ひとつ（、、）のみ。

その確信を以てして、僕にはまだわからなかった。きっと、どうしようもなく歩き続ける僕の足はそれを知っているのだろうが、足に尋ねたところでそれには口がないのだから答えてくれようはずもない。だから僕は空に向かってその問いを放り投げるしかできなかった。

——そも、彼女とは誰なのだ。

空は非情なほど澄んだ青色をしていて、いかにも彼女そっくりだった。

不可聴民

僕がその扉を開いたとき彼女は既に退屈そうにしていた。彼女は終始そこに転がった死体を見つめて何かぶつぶつ言っていた。でも僕にはそれが聞こえなかった。僕の陳腐な耳では聞き取れなかった。彼女？ さあ。わからない。

この世の怠惰と汚濁の上に純白を塗り込められた部屋のなかでも彼女はひときわ真つ白な存在だった。あらゆる穢れを寄せつけない肌と、悲しみだけを帯びた紅い髪を持っていた。彼女は僕に気がつかないようだったので、僕はそつと忍び足で死体に向かって歩いていった。

死体の名前は僕が誰より知っている。ずっと探していたのだから。ただ、死んでいることは少しだけ意外だった。

「はじめまして、か」

死体からは果物を潰して魚介類と混ぜたような臭いがした。喉の奥がつんとする臭いだった。刺激臭に顔をしかめる僕に、はじめて彼女のほうから問いかけがあった。

「そこに、いるのは、だれ？」

僕はそれをはつきりと聞きとった。

「いつから、そこに？」

眠りたくなるような声だった。

僕は名乗った。自分がどういう立場の人間で、どうしてここに来たのかも、この家に勝手に揚がり込んだことへの謝罪も忘れなかった。

彼女は興味がなさそうな様子で僕の言葉を聞き、そうして僕の謝罪にけたけたと笑った。それが僕に対する嘲りか、憐みだったのか、それとも侮蔑だったかはわからない。どれにしても僕のほうで不快感を覚えることもなかった。

僕は彼女に何か尋ねなければいけなかったのに、どうしても声が

喉から先には出なかった。

僕は彼女に何か尋ねなければいけなかったのに、どうしてもそれが何だったか思い出せなかった。

死体のほうを見る。既に腐敗が始まって無残な姿になりつつあるが、顔の判別くらいは容易にできそうだった。それは僕がこれまで何度も確認してきた顔だ。ところどころ腐り落ちて肌は穴だらけになっており、なかの肉が覗いているけれど、まだ骨までは抉れていなかった。

彼女はどこも見ていないようで、じつと空を見つめていた。冷たい色を湛えた瞳には光がない。海底の泥のような虚ろな眼。虚無に沈んで、それでも恍惚を思わせる眩んだ眼。

彼女はどこを見ているのか。彼女には、どこが見えているのか。僕には知りえなかった。ただその視線が宙を彷徨うのを見ているのか。

果たして彼女には僕が見えていただろうか？

そして彼女はそこに転がったものが、腐り始めた人間の死体なのだと気づいているだろうか。僕には甚だ疑問だった。だって、彼女はいやに落ち着いている。相変わらずぶつぶつと呟きながら。

僕にはそれが、言語のようには聞こえなかった。

↓

眼暗草紙

むかしむかし、いろんな神さんがおった。日の神さんに海の神さんに、森の神さん、石の神さんなどというのもおった。そして神さんというものは、どんなものでも大概は山におるもんだった。だから、山つちゅうのは勝手に入ってはならなんだ。

人間は、山に入らねばならんとき、儀式をしたということだ。詳しいことは、今となっては誰も知らん。

なぜかという、神さんが山におらんようになった。人間も、神さんを信じないようになったので、儀式のやりかたをを伝えんようになっちゃったのだろう。それで今では誰でも山に入る。山に入っちゃ、神さんから赦しをいただかんでも木を伐るし、魚を釣る。

山に神さんがおったとき、山のもんはなんでも神さんのもんだった。

山に神さんがいなくなったので、山のもんを人間が持ち出せるようになった。そう思っておった。ところがそうではなかったのだね。神さんはまだ山におったのだ。

でも、人間はそれに気づかなんだ。

どうしてだろうね、人間には神さんが見えんようになってしまったのだという。眼で見えんものを人間は信じなくなったのだと、いう。

神さんはそれでも文句を言わなんだ。言っても聞こえなんだのかもしれないがねえ。眼で見たって見えんくらいだから、言葉も聞こえないようになったのかもしれないねえ。とにかく神さんは人間が山のなかを行ったり来たりしているのをずーと眺めておるんだというよ。

いいかい、あんた、山に入るときにはな、神さんにね、入りますよ、と言うもんだ。そうすりゃ神さんだって怒らない。

神さんと呼ぶのは神さんたちが人間の上にいるということ、お上

さんと呼んでるってことだ。だから神さんと呼ぶからには神さんを敬わないといけない。そうすると神さんは喜んで、気まぐれに人間を助けてくれるもんだった。

今の神さんは怒っているよ。人間は神さんの山を好き放題荒らしている。入ってはならん場所に入る。

神さんは、山のなかでも特に好んでいる場所があつて、そこに人間が近づくことをいちばん嫌うのだというが、人間にはそれがどこなんだかわからんし、まず誰も神さんがおるうちゅうことを信じておらん。

神さんはもう人間を助けてはくれんだろう。もしかしたら、人間に害を為すということもある。

そうだ、神さんは今でもときどき見えることがあるんだと。神さんを見ることのできる人間がいて、そして訊けば神さんの姿は、誰が見ても違ふそうだ。同じ顔、同じ服の神さんをふたりで見ることはないんだと。そういうものらしい。

それで、もしもだ、もしもあんたがこれから先どこかで神さんを見ることができたなら、神さんになんとか謝ってほしい。人間の多くは見えん者で、それができんからね。

神さんに謝るとき、神さんの山はいつかきつとお返しすると言っておくれ。それで赦してもらえるかはわからんが。

さて、話はおしまいさ。もう何も無いよ。
なにか忘れたこと？

ああ、そうそう最後にひとつだけ。神さんが見えんようになってから、神さんにはもうひとつ名前がついたんだよ。その名前というのはね、そのまま「見えない」という意味だ。

これは、神さんを知らんでもこの名前は、あんたも知ってるだろうと思うけどねえ。ただ、神さんと同じで、書く字がちょっと違うから。

——隠れる、と書くんだ。隠れているから見えんのだ、と言いた
いんだろうね。

そしてそれは、「おに」と読むんだよ。



性善論者

僕はある空家の前にいる。空家というのは某県某町にある、どこもかしこも真つ黒に塗りつぶされた不気味な家だ。

どうして僕がこんなところにいるのか。それは、たまたま知り合った刑事さんから昔の事件に関わる不思議な話を聞いて、いてもたってもいられなくなったせいである。

これでもライターのはしくれだ、物書きの本能みたいなものかもしれない。

それにしても気持ちが悪いな。外壁に塗られた黒は、ペンキにしてはつやのない色をしている。それになんだろう、こういうのは刷毛で塗ると普通なら毛の跡が残るはずなのに、それどころか斑さえない徹底ぶりだ。

誰が住んでたんだろうこんな悪趣味な家。

玄関は薄暗かったので持ってきた懐中電灯を取り出した。木製のドアがふたつと階段が見える。ドアの鍵はどちらも壊れていて、なおかつ錆びているので開けられそうにない。

いいのだ、僕の目当ては階段の上にあるんだから。

僕はふと足元を見た。木製のプレートがふたつ落ちている。ドアに掛けられていたものだろうか。けれどもそれには何も書かれておらず、つまりドアプレートの機能を果たしてはいなかった。何のために掛けていたのだろう。

さて、階段を昇ってみよう。木材がずいぶん傷んでいるので踏むだけでも大きな音がして心臓が跳ねた。今にも壊れそうだ。けれども今さら引き返すわけにもいかないので、僕は息を止めて慎重に一步步ずつ一段ずつ昇っていった。

二階にもドアがたくさんある。どれもこれも型に押し込んだようによく似た色と形をしたドアだ。そしてやっぱり無記名のドアプレートが無意味に提げられている。

名無しのドア。そんなことを考えた。

そのなかにひとつだけ異彩を放つものがある。これまた真っ黒に塗りあげられた代物だ。僕は思わず笑みを浮かべた。わかりやすくていいではないか。

しかしドアノブまで黒く塗るとは偏執的だ。

そして、僕はついにそれに手を伸ばす。黒い家にたったひとつしかない黒いドア。地獄への入り口とかそんな雰囲気しか漂っていない。そう、世界じゅうの偽善と怠惰を押し込めて無に帰したような色。

僕は泣きたい気持ちを抑えてそれに手をかけた。

ああどうしてこんなに胸がせつないのだろう。さっぱり意味がわからない。僕は感動ものの映画やドラマでも泣いたことはないのに、卒業式の類だつて泣かなかったのに、どうしてこんな薄暗くて不気味な空家のなかでひとり理由もなく泣きそうになっているんだ。

嬉しいでも悲しいでもない。何でもない。ただただ虚しかった。

僕は震える腕を無理やり捻ってドアを開いた。よく考えたら鍵がかかっていないか確認していなかったが、なぜだか僕はそのドアが開くと確信していたし、実際なんの障害もなく安らかにドアは動いた。

肝要な部屋のなかには想像に難くないほど漆黒に塗りつくされていた。やっぱりな、と僕は思った。そこは何もかもが想像していたとおりだった。何もかもが、話（、）に（、）聞いた（、、）とおりました。

片隅に、ロッキングチェア。黒い革張りの高そうな椅子。

もう片隅に、誰かの死体。寒そうに身体を丸めて死んでいる。

そしてやはり僕の正面には、何よりも黒い、真っ黒ななりをした少女がいた。
おに

性善論者（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

ちよいちよい名前が変わることに定評のある実アラズです。

えーとですね。他の連載もあるのにどうしたの？という電波を受信したので自己消化させていただきましたと、これは大学のサークル用にしたやつです。なんで書き下ろしではないんですが（これ以外でなろうに提出してるものは大抵書きおろしてます）、どうせ書いたんならいろんな人に見てもらおうかなと思ってこっちまで引っぱりました。うん。

準備期間がひと月ちょいくらいで個人的には練り足りない部分も多々ありますが、暇つぶしにはなる量だと思うのでお気軽に読んでいただけたら幸いです。あ、これ最後に言うことじゃないや。まあいいか。

とりあえず私にはまだホラーを書くスキルはないようです。とりあえず怖いのもより読後感が気持ち悪いのを目指したような気もするんですが、どうでしょうか。

次回は土の溟海でお会いしましょう。では。

2010 - 7 / 10 実アラズ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6245/>

亡目奇談

2011年4月29日19時55分発行